

令和6年度 第3学期始業式式辞

新年あけましておめでとうございます。

今年のお正月は比較的、大きな事故や災害も無く、穏やかな年明けとなりました。当たり前のことかもしれませんが、あらためて「平穏無事」ということの有り難さを感じたところです。

令和7年、2025年が、皆さんにとって実り多い、素晴らしい年となりますことをお祈りします。

2025年、年月の流れは早いもので、2001年に21世紀を迎えてからすでに四半世紀が経とうとしています。2001年当時、私（40歳）はある県立高校で生徒指導を担当し、始業式や終業式では校長先生の話のあと、毎回私も話をしていました。

2001年、3学期始業式で私は

- ・小学5・6年の担任の先生から、「心身ともに健康であれ」ということと、
「君たちは21世紀を背負って立つ人間だ。」と言われた。小学生では「21世紀を背負う」ことの意味がわからなかったが、歳を重ねるに従って理解し、今、その先生の言葉の深さを噛みしめながら21世紀を迎えたこと。
- ・そして、21世紀の序盤、前半は我々の年代が頑張る。しかし、それ以降は君たちが中心に活躍する時代になるということ。

というような話をしたと思います。

当時の教え子からいただいた今年の年賀状には、子育てのことや職場での一端を書き添えられたものもあり、時の流れを懐かしく感じさせてもらいました。

2025を迎え、数年先はいよいよ君たちが社会を支えるときを迎えます。5年先、10年先を意識して、今を大切に過ごしてほしい。

「心静かに新年を迎え、一年の計を立てる」とか「心に期す」とか、よく言われますが、皆さんはそのようなことを経験したことがありますか。

人はさまざまで、その歩み方も異なります。しかし大事なことは、今年は去年のままであってはならないこと、今日は昨日よりも進歩させること。今日の営みや反省のうえで、今日とは違った明日を迎えること、願わくば、そんな意識で一年を過ごしてもらえればと思っています。今日の一日は、必ず君たちの未来につながっています。

そして、もし、今年の年の始めに「心に期す」ものがあれば、また今後「心に期した」ということがあれば、その気持ち・感覚を大切にしてほしい。君自身の人生の大きな節目となり、生涯の分岐点になるかもしれません。「心に期す」という経

験を是非とも味わってください。

話を変えます。

4年ほど前に、ある先生が私におっしゃったことです。ある先生とは今年89才になられる現代の書道界の第一人者で、令和5年（2023年）には文化勲章を受章された方です。

その先生が私に「あなたは今、順風のときか逆風のときかわからんが、一番よくないのは無風のときである。無風はダメだ。私はこれまで3回大きな逆風が吹いたが、何とか乗り切れた」というような話をしていただいた。私は「毎日が逆風です」と心で思いながら、「ありのまま、風を感じ取れるように精進します」と応えてその課題が終わりましたが、たいへん緊張した貴重な時間でした。

同じようなことを、松下幸之助さんもおっしゃっています。松下氏はパナソニックホールディングスの創業者で、「経営の神様」といわれた方です。

「古来、偉大なる人は逆境にもまれながらも、不屈の精神で生き抜いた経験を数多く持っている。まことに逆境は尊い。だが、これを尊ぶがあまりに、逆境でなければ人間が完成しないと思いこむことは、一種の偏見ではなからうか。

逆境は尊い。しかしまた順境も尊い。要は、逆境であれ、順境であれ、その与えられた境涯に素直に生きることである。謙虚の心を忘れぬことである。

素直さを失ったとき、逆境は卑屈を生み、順境は自惚れを生む。その境涯に素直に生きるがよい。

素直さは人を強く正しく聡明にする。逆境に素直に生き抜いてきた人、順境に素直に伸びてきた人、その道程は異なっても、同じ強さと正しさと聡明さを持つ。」とされています。

ところで、今年の箱根駅伝は、青山学院大学が2年連続8回目の総合優勝で幕を閉じました。そうしたなか、「赤門（東京大学の象徴）リレー」が話題となったこと、皆さんも知っているかと思います。

予選会敗退校の選手の中から、好タイム保持者で編成される関東学生連合チームにおいて、8区の秋吉選手（東京大工学部3年）から、9区の古川選手（29歳 東京大大学院博士課程4年）にたすきをつないで駅伝ファンを沸かせました。古川選手は、高校時代に箱根駅伝出場の夢を諦めましたが、29歳でその夢を叶えました。古川選手への給水は、東大の八田教授（65歳）がつとめられ、しばし併走されたあと、古川選手の後ろ姿に八田先生がバンザイをして見送られている姿に、私は感動しました。八田教授は長年、東大陸上部の部長をされ、運動生理学の権威として知られ、箱根駅伝の発展にも力を注いでこられた方です。今年3月に退官。また、古

川選手は「走り」について科学的に研究し、この春からは京都工芸繊維大で博士研究員になる予定で、お互いに最後のチャンスでした。

「赤門リレー」だけに限らず、すべての選手が逆境や順境を素直に受け入れ、その時々で懸命に対応して、次にバトンをつないでいるんだなと思いながら観戦していました。

最後に、今年は巳年。60年周期の暦、十干十二支では乙巳（いっし・きのとみ）の年。乙巳の年は歴史的にみれば、645年の乙巳の変、1185年の壇ノ浦の戦い、1905年のポーツマス条約など、大きな変化が起こっている年です。

今年一年、皆さんの心身ともに健康を願うとともに、自らに吹く風を感じながら、いい意味の変革の年にしてくれることを期待して、話を終わります。

以上